

三国期段階における 烏丸・鮮卑について

交流と変容の観点から見た

The Wuwan and Xianbei during the Stage of the Three Kingdoms:
A Study from the Perspective of Interaction and Changes

川本芳昭

KAWAMOTO Yoshiaki

はじめに

①前漢・後漢期の状況－属民化と傭兵化

②後漢末・魏晋期の状況－自立化と融合の始まり

結びにかえて

【論文要旨】

烏丸と鮮卑については、既に我が国においては内田吟風、中国においては馬長寿の古典的研究をはじめとして、文献的には既に解明され尽くされている感がある。しかし、米文平による鮮卑石室の発見により新たな知見が加わり、また近年では魏堅、孫危などに代表される鮮卑墓葬の研究に見るような、考古学的観点からする鮮卑の研究も格段に進展してきている。それ故、そのような成果を踏まえ、当該時期の烏丸・鮮卑の問題について再検討することは大きな意味をもっている。

周知のように鮮卑諸族は南下を経て、中国との関わりを深めつつ、やがて中国の域内で鮮卑諸朝を建て、その中の一つである北魏は中国の統一王朝である隋唐帝国の母胎となる。また、これも周知のように秦代の長城の築城により、黄河文明の開始に発した華夏諸族の拡大は、長城という、それ以南の地を中国、以北の地を胡族の地とするうえでの具体的かつ象徴的なシンボルをもつことによって、一つの画期を迎えることとなった。こうした事態の出現によって、それ以前の時代の華北においてみられた華夷混在の状況は克服され、中国の周辺に四夷が存在するという時代を迎え、長城を南北の境とする華夷秩序は以後の時代に継承されて行くことになる。しかし、先に述べたように中国を目指して南下する北方諸族の動きはその後にも継続し、遙か後世のモンゴルや満州族の例に見るように、中国と共にそれらの諸族の原住地をも包含した大帝国が建国されるようになる。このような観点に立つとき、本稿の表題に掲げた三国期段階における烏丸・鮮卑の問題は、中国史、あるいは東部ユーラシアの歴史全般とどのような関わりもつといえるのであろうか。

本稿は以上のような問題関心に立って、三国期段階における烏丸・鮮卑の移動、交流、それにとりもなう変容のもつ歴史的意味について考察したものである。

【キーワード】 烏丸（烏桓）、鮮卑、匈奴、移動、夷狄、中国

はじめに

『三国志』魏書卷30は、烏丸伝、鮮卑伝と東夷伝とからなる。本共同研究『『三国志』魏書東夷伝の国際環境』における筆者の担当分野は、その「東夷」と同時代に活動した烏丸（烏桓）、鮮卑について考察することである。

同時代の烏丸と鮮卑については、既に我が国においては内田吟風氏⁽¹⁾、中国においては馬長寿氏⁽²⁾の古典的研究をはじめとして、文献的には既に解明され尽くされている感がある。しかし、米文平氏による鮮卑石室（嘎仙洞）⁽³⁾の発見により新たな知見が加わり、また近年では魏堅氏⁽⁵⁾、孫危氏⁽⁶⁾などの研究に代表される鮮卑墓葬の研究に見るような、考古学的観点からする鮮卑の研究も格段に進展してきている。それ故、そのような成果を踏まえ、当該時期の烏丸・鮮卑の問題について再検討することは大きな意味をもっているといえるであろう。

拓跋鮮卑の建国した北魏の歴史を記した『魏書』の卷1序紀には、大鮮卑山（興安嶺北部）⁽⁷⁾の存在した鮮卑石室の地から南下して北魏建国に至るまでの拓跋鮮卑の神話時代に関する記述が見えるが、そこに、

聖武皇帝、諱は詰汾という。その父・献帝が南に移動することを命じたので、山谷高深の地を越え、九難八阻の地を過ぎ、とどまろうとした。そのとき神獣が現れた。その形は馬に似、その声は牛に類していたが、その神獣の導きによって、歴年の後やっと（深山の地から）出ることができ、始めて匈奴の故地⁽⁸⁾に至った。

とある⁽⁹⁾。今日、数多くの鮮卑墓の発掘などを通じて、そのルート、及び匈奴の故地に至ってから後の南下ルート⁽¹⁰⁾がかなり具体的に想定されるようになった。鮮卑の場合、現在知りうるところでは、その南下の出発点は現在の中露国境の地、黒龍江と接する地域としての嘎仙洞の存在する大興安嶺北部にあったと考えられるが、上記の『魏書』の記載によれば、それはのちには匈奴の移動とも関わるものとなったことが想定される。つまり、鮮卑の南下は北アジアにおける諸族の移動という問題と絡む問題であると考えられるのである。

また、例えば『資治通鑑』卷108、晋紀30、孝武帝太元21年（396）7月、魏王拓跋珪称尊号の条に、胡三省は注記を加え、

ああ、隋より以後、名称の時に揚がるもののうち、代北の子孫（魏晋南北朝期に華北に入居し、鮮卑の建国した北魏が都をおいた大同地域に集居した鮮卑など北族の子孫）は、十のうちその六、七を占める。（氏族の高貴さを追求して）出身やその高下を論じること、そもそも何の益があるであろうか。⁽¹¹⁾

とあり、隋唐期の指導者層の六、七割が鮮卑系の人々によって占められていたことを指摘しており、また、沈括はその著である『夢溪筆談』卷1、故事1において、

中国の衣冠は北齊より以来、全く胡服を用いている。窄袖緋緑の短衣、長靱の靴、蹀躞帯などはみな胡服である。⁽¹²⁾

と述べ、鮮卑系の国家である北齊以降、中国の衣冠が胡服、すなわち鮮卑のそれとなったとしている。

周知のように鮮卑諸族は南下を経て、中国との関わりを深めつつ、やがて中国の域内で鮮卑諸朝

を建て、その中の一つである北魏は中国の統一王朝である隋唐帝国の母胎となる⁽¹³⁾。つまり、上述した南下は北アジアにおける諸族の移動のみならず、中国史、あるいは東部ユーラシアの歴史全般とも関わる問題でもあったのである。

また、翻って考えるに、周知のように秦の始皇帝による中国の統一、万里の長城の築城により、黄河文明の開始に発した華夏諸族の拡大は、長城という、それ以南の地を中国、以北の地を胡族の地とするうえでの具体的かつ象徴的なシンボルをもつことによって、一つの画期を迎えることとなった。こうした事態の出現によって、戦国時代の中山国の存在に見るような、それ以前の時代の華北においてみられた華夷混在の状況は克服され、中国の周辺に四夷（東夷、西戎、南蛮、北狄）が存在するという時代を迎え⁽¹⁴⁾、長城を南北の境とする華夷秩序は以後の時代に継承されて行くことになる⁽¹⁵⁾。

しかし、先に述べたように、その長城地域、さらにはその内側の中国を目指して南下する北方民族の動きはその後にも継続し、遙か後世のモンゴルや満州族の例に見るように、中国と共にそれらの諸族の居住地をも支配する大帝國が建国されるようになる。このような観点に立つとき、本稿の表題に掲げた三国期段階における烏丸・鮮卑の問題は、中国史、あるいは東部ユーラシアの歴史全般とどのような関わりをもつといえるのであろうか。

本稿は以上の問題関心にたって、三国期段階における烏丸・鮮卑の移動、交流、それにとまなう変容のもつ歴史的意味について考えてみようとするものであるが、以下ではそれを、前漢・後漢期（除末期）の状況、後漢末・魏晋期の状況の二期に分けて考察することを通じて追求することとする。

①……………前漢・後漢期の状況-属民化と傭兵化

本節では、前漢・後漢を通じて烏丸・鮮卑が匈奴、漢の間にあって属民、傭兵としての存在であったことについて取り扱い、それが中原王朝との関わりを深めてゆく過程を追求する。

烏丸と東部鮮卑は始め蒙古草原の東南部のシラムレン河、ラオハ河流域に分布し、烏丸は南に、すなわちラオハ河流域に、鮮卑は北に、すなわちシラムレン河流域にあった。この流域は三つの地域からなる。シラムレン以南は黄土地帯であり、農耕に適している。シラムレン以北は東西に二地域に分かれ、西は草原地帯であり、蒙古草原の性質と同様で、遊牧に適しており、東は森林地帯であり狩猟に適した地域である。

このうちラオハ河流域に分布した烏丸が、早い段階で原始的農耕を開始していたことを『後漢書』の記載からうかがうこともできる⁽¹⁶⁾。

『史記』卷110匈奴伝によれば、

燕に賢將秦開というものがあり、胡（匈奴）に人質とされていた。胡は甚だこれを信じていた。帰国して東胡を襲い、これを千余里の地に退けた。荊軻とともに秦王を刺そうとした秦舞陽というものは開の孫にあたる。燕もまた長城を築き、造陽から襄平におよんだ。また、上谷、漁陽、右北平、遼西、遼東の各郡を置いて胡を拒んだ。当時、中国の戦国七国のうちの三国は匈奴と境を接していた⁽¹⁷⁾。

とある。烏丸や鮮卑からなる東胡が居住したシラムレン、ラオハ流域の南は古代の上谷、漁陽、右

北平、遼東、遼西の五郡の地域を包含していた。右によればその五郡の地が燕国に帰したのは戦国末年の燕の將軍・秦開が東胡を駆逐したことによることがわかる。また、『史記』卷129貨殖列伝には、その燕について、

燕もまた勃碣の間の一都会である。南は斉趙に通じ、東北は胡に接している。上谷から遼東に至るまで、地は遼遠にして、人民は希である。しばしば寇略を被り、大いに趙代の俗と類似している。民は荒々しく慮ることが少ない。魚鹽棗栗が豊富であり、北は烏桓、夫餘に隣接し、東は穢貉、朝鮮、真番の利を統べている。⁽¹⁹⁾

とある。これらは既に戦国の時代から烏丸・鮮卑と辺境の漢人とのあいだの頻繁な接触のあったことを想定せしめるものである。

漢になって、劉邦は同郷の盧綰を燕王に封じたが、彼は劉邦が死ぬとその衆を率いて匈奴に降り、東胡盧王とされた。その後、景帝の前144年に綰の孫の它は東胡王をもって漢に降った。これは盧氏一族が東胡とほぼ50年にわたって関わりをもっていた可能性を示唆するものである。

そもそも烏丸の匈奴への服属は、冒頓単于による攻撃を受けてからのことであるが、『後漢書』卷90烏桓伝には、そのこと、および烏丸が漢の武帝のときからその羈絆を脱したことなどを伝え、烏桓は(匈奴の)冒頓から破られてから、衆は遂に孤弱となり、いつも匈奴に臣服し、歳ごとに牛馬羊皮を輸した。時期を過ぎても納めることができなければ、その妻子を没収した。漢の武帝が驃騎將軍霍去病を派遣し匈奴の左地を撃破するに及んで、烏桓を上谷・漁陽・右北平・遼西・遼東五郡の塞外にうつし、漢の為に匈奴の動静を偵察させた。その大人は歳ごとに一たび朝見する義務を負った。そこで始めて護烏桓校尉を置いた。その官秩は二千石であり、(天子の使節であることを示す)節をもって、烏桓を監領し、匈奴と交通できないようにした。⁽²⁰⁾とある。こうして、烏桓は上谷・漁陽・右北平・遼西・遼東五郡の塞外に移ったわけであるが(前120年)、当時の主要な根拠地はラオハ河流域の赤山と白山にあった。

また、右によれば、それ以前における烏丸の匈奴へ従属とは、税の納入を課されるものであり、妻子の「人質化」をも想定させるものであったことが窺われる。また、前漢の武帝のとき、匈奴の膝下を離れ、前漢の斥候を担わされるようになったということは、逆に匈奴の膝下にあるときは、そのような軍役が烏丸に課せられていたことをも想定させるものである。

上の史料からはまた、漢の場合、護烏桓校尉という中央派遣の官をおいて烏丸を統制するようになったことなどがわかるが、匈奴の場合、そうしたものが設置されていたのかどうかの詳細は、不明である。ただ、『後漢書』烏桓伝に、王莽のとき、烏丸が王莽の施政を怨んだことを伝え、

烏丸は王莽に怨みを懐くようになり、それを受けて匈奴は烏丸の豪帥を誘って、彼らを吏とし、他のものはこれを羈縻した。⁽²²⁾

とあるのによれば、匈奴の場合も相似た体制がとられたが想定される。ただしそれが烏丸の吏であったという点はやや趣を異にしていたことを想定せしめる。

このように漢と匈奴との関係が徐々に前者の優位に決する動きと連動し、烏丸はその勢力を拡大すると同時に漢との関わりを深めていったのである。

王莽の時代になると『後漢書』卷90烏桓伝に

王莽は位を篡うに及んで、匈奴を撃とうとして、十二部の軍を興し、東域將の嚴尤に烏桓・丁

令の兵を率いて代郡に駐屯させた。そこで烏桓の妻子をみな郡県において人質とした。烏桓はその地の風土に慣れないので、久しく駐屯して休むことができないのを懼れて、屢々拝謁して辞去せんことを求めた。莽が決して許そうとしなかったので、遂に烏桓たちは背いて逃亡し、本拠地へ還って抄盗をなした。そのため、諸郡は尽くその人質を殺した。このため烏桓は王莽に怨みを懷くようになり、それを受けて匈奴は烏桓の豪帥を誘って、彼らを吏とし、他のものはこれを羈縻した。⁽²³⁾

とある。この史料は上述のような趨勢下にあつて生じた烏丸の勢力拡大と漢との関わりの深化が、同時に漢への隷属化の進行とそれへの反発と表裏の関係にあつたことをよく伝えているといえよう。

さらに、後漢の光武帝の時代になると、こうした状況にもうひとつの大きな変化が生じる。すなわち、『後漢書』巻1下 光武帝紀、建武22年(46)の条に、

この歳、……烏桓が匈奴を撃破した。匈奴は北徙し、漠南の地は空しくなった。⁽²⁴⁾

とある。『後漢書』巻90 烏桓伝は、これと同様のことを伝え、さらに

(建武)二十二年、匈奴の国が乱れ、烏桓はその弱きに乘じてこれを撃破した。匈奴は北の方数千里の地へ移り、漠南の地は空しくなった。帝はそこで幣帛として烏桓に賂いした。二十五年、遼西烏桓の大人郝旦ら922人は、衆を率いて、闕に至って朝貢し、奴婢牛馬および弓虎豹貂皮を献上した。この時四夷は朝貢し、馭をつなぎ至った。天子はそこで命じて大会勞饗し、珍宝を賜った。烏桓には宿衛に留まることを願うものもあった。その渠帥の封ぜられて侯王・君長となるものは81人に上り、みな塞内に居住した。縁辺の諸郡に住ませ、種人を招来させ、その衣食を給したので、(烏桓は)遂に漢の偵候となり、匈奴・鮮卑を撃つのを助けた。時に司徒掾の班彪は上言し、「烏桓は天性輕黠であり、好んで寇賊をなす。もし久しく気ままにさせ総領する者がいなければ、必ず復た居人を侵掠することになるであろう。ただ漢に降ってくるものを管理する下級官のみでは、おそらくこれを制御することはできない。臣は愚かですが、復た烏桓校尉を置くべきであると思います。誠にその制御に益があり、また国の辺境に対する心配も省くことができます。」と言った。帝はこれに従った。その結果、また烏桓校尉を今度は上谷の寧城に置くことになり、軍営の府を開くことになった。また、同時にこの官は鮮卑をも監督し、^(25・26) 質子への賞賜や歳ごとの互市も行った。

とある。つまり、建武25年(49)、烏桓は、上述の上谷・漁陽・右北平・遼西・遼東五郡の塞外から塞内に入るようになったのであり、その後、上記五郡以外の中国内の郡である代郡、雁門、太原、朔方や内蒙古のオルドス草原一帯などにその居住地を拡げていったのである(『後漢書』烏桓伝)。

このことは、⁽²⁷⁾ 南匈奴の中国内への移住と同様に、秦漢帝国による長城の建設によって中国と胡の世界とが長城という具体的な巨大建造物を通じて分断されたにもかかわらず、それを乗り越える形で胡漢の交流が顕在化している点で極めて注目すべき現象というべきである。

そして、これと同様の現象が、烏桓に継いで南下し、次代の漠北のリーダーとなる鮮卑の場合にも、更に拡大された形で生じてくるのである。

次にこのような観点から鮮卑の動向について考察することとする。

右で引用した『後漢書』烏桓伝に、建武25年の条に見える、班彪の上言に対する後漢の処置として、

烏桓校尉が鮮卑をも監督し、烏桓の場合と同じく、鮮卑に対して質子や互市の処置をとったことが示されているが、この方針は後漢中期の安帝の時代においても維持された。すなわち『後漢書』烏桓伝に、

安帝の永初中（2世紀初）、鮮卑の大人燕荔陽が闕に至り朝賀した。鄧太后は燕荔陽に王の印綬・赤車を賜い、参駕させ、烏桓校尉の治所である寧城の下に止め、胡市を通じ、南北両部の人質のための館（質館）築かしめた。鮮卑の邑落百二十部は各々人質をさしだした。⁽²⁸⁾

とある。またこれに先立つ永平元年（58）のこととして、『後漢書』卷90鮮卑伝に、

時に漁陽の赤山烏桓である歆志賁らは、しばしば上谷に寇した。永平元年、祭彤はまた都護の偏何に賂いして、赤山烏桓の歆志賁を破ってこれを斬った。この結果、鮮卑の大人たちはみな帰附し、遼東郡に至って賞賜を受けた。青徐二州は毎歳二億七千萬錢を給するのを常とした。そのため明章二世にわたり、辺境は事なきをえた。⁽²⁹⁾

とある。このときの赤山の役は、中国東北の塞外の地における烏丸と鮮卑の勢力交替の分水嶺ともいべき出来事であって、以後烏丸の勢力は種々に分化し、長城以北の烏丸の大部分は鮮卑に飲み込まれて行くことになるのである。

また、その後の和帝の時代のこととして、同伝に、

和帝の永元（89～105）中、大將軍竇憲は右校尉耿种を派遣して、匈奴を撃ち破った。このため北单于是逃走し、鮮卑はそのため移って匈奴の地に拠った。匈奴の余種でその地に留まっていたものはなお十余万の落を数えていたが、彼らはみな自ら鮮卑と号した。鮮卑はこれによってようやく隆盛に向かうようになった。⁽³⁰⁾

とあるように、北单于に率いられていた匈奴は敗走し、その後残存した十万落を超える多数の匈奴は鮮卑に吸収されていったのである。

本稿の冒頭で鮮卑拓跋部の南下にまつわる神話について述べたが、その神話の中でかれらが「匈奴の故地に至った」とあるのも必ずや上の事柄と関連するであろう。

②……………後漢末・魏晋期の状況-自立化と融合の始まり

本節では後漢末・魏晋期における烏丸・鮮卑について考察し、その考察を踏まえその後の五胡十六国・北朝時代を展望することとする。

(1) 固有の風俗の存続

『三国志』魏書卷30烏丸鮮卑伝序文の注に、当時の烏丸の風俗・習慣などを伝え（番号・太字は筆者加筆）、

『魏書』にいう。烏丸とは東胡である。……

- ①（騎射遊牧）その俗は騎射をよくして、水草に随い放牧し、定住することがない。
- ②（ゲル）穹廬を住まいとし、それはみな東向する。
- ③（食肉飲酪衣毛）日々、禽獸を弋獵し、肉を食い酪を飲み、毛氈を以て衣をつくる。
- ④（賤老・母系）若きを貴び老いたるを賤しむ。その性は粗暴で、怒れば父兄さえも殺す。し

かし、終にその母を害するという事はない。母には族類があり、父兄は己を以て自立するので（以己為種）、報復する者がいないからである。

⑤（世襲なし）常に勇健にして闘訟あい侵犯するものを治めることのできるものを推募して大人とする。邑落には各々小帥がいるが、世襲ではない。

⑥（部族制・無文字）数百から千単位の落が一部を構成し、大人からの招集には、木に刻んで伝令し、邑落に伝える。文字はないけれども、その部衆は決して違犯することはない。

⑦（無姓）氏姓は一定せず、大人の健やかなるものの名字をもって姓とする。

⑧（徭役なし）大人以下は、各自で畜牧治産し、たがいに徭役するという事はない。

⑨（略奪婚・労役婚）その嫁娶はみなまず私通し、女を略取して去り、半年百日ののちに、媒人を仲立ちとして馬・牛・羊を送り聘娶の礼をなす。婿は妻を随えて帰り、妻家にまみえ尊卑の別なく、朝にはみな拜す。しかしその父母を拝することはない。妻の家のために僕役すること二年にして、妻家ははじめて厚礼を以て女を送る。夫婦の住まいや財物はすべて妻の家から出る。故にその俗は婦人の計に従う。ただし、戦闘に関わることは（婦人にはよらず）自ら決定する。

⑩（尊卑なし）父子男女は、相對蹲踞する。

⑪（弁髪）みな頭の髪を剃る風習を持ち、軽便であるという。婦人が嫁入りするときには、かえって髪をのばし、分けて髻を結び、句決を著け、金碧を飾る。中国の冠歩搖のようなものである。

⑫（レヴィレート）父兄が死ぬと、その後母を妻とし嫂を執る。もし嫂を執ることがなければ、己の子が親族の順番に基づいて伯叔に娶せる。死ねばそのもとの夫にかえす。……

⑬（武の世界・焼葬・犬馬）戦いで死ぬことを貴いこととし、屍をおさめるには棺を用いる。人が死ぬと哭し、葬る際には歌舞して送り、よく太った養犬に采繩をつけ嬰牽させ、亡くなったものの乗っていた馬、衣服、生きていたときの服飾品などはみな焼いて葬送する。とくに厄を犬に憑くようにして、死者を護送させ、神霊を赤山に帰す。赤山は遼東の西北数千里の地にある。中国人が死者の魂神を泰山に帰すようなものである。葬日になると、夜に親旧の貝を聚めて坐らせ、犬馬を牽きて並べ、歌哭する者は肉を擲げてこれにあたえる。二人の人に呪文を口頌させ、死者の魂神がただちに至るようにさせ、險阻を歴るも、横鬼が死者の魂神が赤山に到達するの遮護することがないようにさせる。然る後に犬馬を殺し、衣物を焼く。……⁽³¹⁾

と見える。烏丸の中国化は前漢・後漢を通じて進行していたので、魏の時代にはかなりの烏丸の風俗は、上の①～⑬の状態から相当変質していたと考えられる。ただし、それは入塞した烏丸の場合であって、塞外に存続した烏丸のそれは、上述の風俗を留めているものもまだかなりいたと考えられる。また、『後漢書』鮮卑伝に、

鮮卑も、また東胡の支である。別れて鮮卑山に依る。故に因りて（その名を）号した。その言語・習俗は烏桓と同じである。⁽³²⁾

とあるように、烏丸に比べ中国との接触が遅れた鮮卑は烏丸と同じく同じ東胡の種族であり、風俗・習慣を一にした。⁽³³⁾とすれば、ここに見える烏丸の風俗・習慣を当時の鮮卑のそれと考えても大筋を逸することはないであろう。

また、5世紀の江南にあった王朝である宋の歴史を記した『宋書』に索虜（拓跋鮮卑）の伝があ

るが、そこに

死ねばひそかに埋葬し、墳壟はない。葬送にはいつも棺柩を虚設し、冢櫛を立て、生きている
時の車馬や器用はすべて焼いて亡者を送る。⁽³⁴⁾

とみえる。これは上述の烏丸の風俗^⑬の焼葬の延長線上にとらえることができるであろう。また、その拓跋鮮卑が建国した北魏の歴史を記した『魏書』巻13 皇后列伝に、均田制を実施した北魏孝文帝時代の政治を主導した女性として著名な文明太后馮氏が、夫の高宗文成帝（北魏の4代）が崩御した際とった行動について述べ、

高宗が崩御した。北魏の習慣で、国に大喪があれば、三日の後、皇帝の御服器物はすべて焼焚された。百官と中宮のものはみな号泣してこれに臨んだ。后（馮氏）は悲叫して自ら火中に身を投じた。左右のものがこれを救い、随分経ってからやっと蘇生した。⁽³⁵⁾

とある。高宗の崩御は465年のことであるが、右は3世紀初頭の風習が、5世紀半ばになっても皇族の間に残っていたことを伝えているとされよう。そして、本稿の冒頭で述べた隋唐時代に継承された胡族的要素の存在を勘案すると、このことは、おそらく一般の鮮卑にあっても当てはまると考えて大過ないであろう。

（2）自立化と融合の始まり

ア 自立化

『後漢書』鮮卑伝に、

延熹九年（166）……、朝廷は長年にわたり鮮卑のリーダーを制御出来ないことを思い、遂に使いを遣わして印綬を持参して檀石槐を王に封じ、和親しようとした。檀石槐はこれを拒否し、寇抄が益々激しくなった。檀石槐はその支配領域を分かって三部とし、右北平から東、遼東まで、夫余・濊貊に接する地である二十余の邑を東部、右北平から西、上谷までの十余の邑を中部、上谷から西、敦煌・烏孫に至る二十余の邑を西部とした。各々大人を置いてそのリーダーとして治めさせ、檀石槐に統属した。……光和中（180年代）檀石槐が死に、子の和連が代わって立った。……檀石槐より後、大人たちは遂にその地位を世襲するようになった。⁽³⁶⁾
とあり、後漢末、塞外の鮮卑は、檀石槐という領袖のもとに、大統一を迎え、以後鮮卑の大人の位が世襲に転じたことを伝えている。また、同書烏桓伝にはこれより若干のちのこととして、塞内の烏丸のリーダーたちが邑落を率い、王号を自称、自立化の動きを強めたことを伝え、

霊帝の初め（168）、烏桓の大人で上谷出身の難楼というものがあつた。その勢力は九百余落であつた。遼西には丘力居というものがあつて、その勢力は五千余落であつた。彼らはみな王を自称していた。また、遼東の蘇僕延は千余落を傘下におさめ、峭王と自称し、右北平の烏延は、八百余落を傘下におさめ、汗露王と自称していた。これらはみな勇健で計策に長けていた。⁽³⁷⁾

とある。

上記は後漢末のことであるが、いま、本稿の主たる考察対象時期である三国期段階において、このような自立化が具体的にどのようなレベルで進行していたのかを檀石槐ののちに鮮卑を統合した人物として著名な軻比能の場合をやや詳細に取り上げ追究してみることにしよう。

『三国志』巻30 鮮卑伝に、

軻比能はもと小部族出身の鮮卑である。勇健にして断法が平等で財物を貪らないので①衆人から推されて大人となった。部落は長城の近くにあった。袁紹が河北に拠ってから②中国の人々は数多く亡叛して軻比能に帰付し、③兵器鎧楯の作り方を教えた。すこぶる④文字を学んだので、⑤部衆を指揮する仕方は、中国のやり方に則り、出入や弋獵には、旌麾を建立し、鼓節を以て進退を指揮した。建安中、⑥閭柔（烏丸校尉）を通じて貢献を上った。太祖（曹操）が関中を西征したとき、田銀が河間に反したが、⑦比能は三千余騎を率いて閭柔に随って田銀を撃破した。のち代郡の烏丸が反したとき、比能はその寇害を援助した。太祖は鄴陵侯彰を驍騎將軍として北征させ、これを大破した。⑧比能は長城の外に逃走し、のちまた通じて貢献するようになった。延康の初め（220）、比能は使いを遣わし馬を献上してきた。⑨文帝もまた比能を立てて附義王とした。黄初二年（221）、比能は魏人で鮮卑の地に抑留されている者五百余家を出だして、代郡へ還居させた。明年、比能は部落大人の末子で代郡の烏丸である修武廬ら三千余騎を帥いて、⑩牛馬七萬余口を驅って交市し、魏人千余家を送還して上谷にすまわせた。のち⑪東部鮮卑の大人・素利および歩度根の三部と争鬪し、互いに攻撃しあった。⑫田豫（曹丕即位と共に烏丸校尉）は間に立ってこれらを和合させ、互いに侵略することのないようにした。しかし五年には、比能はまた素利を討った。豫は輕騎を帥いて、ただちに進軍してその後を攻めた。比能は小隊のリーダー瑣奴に命じ、豫を防がせた。豫は進討して、瑣奴を破り敗走させた。このため軻比能と田豫（烏丸校尉）との間には間隙が生じた。軻比能はそこで輔国將軍鮮于輔に書を与えて言った、「⑬夷狄は文字を識らない（夷狄不識文字）。それでも前の校尉閭柔は私を天子様に取り次いでくれた。私は素利とは仇敵の間柄である。過ぐる歳、私はこれを攻撃したが、田校尉（田豫）は素利を助けた。私は陳に臨んで瑣奴を派遣した。使君（田豫）が来ると聞いて、ただちに軍を引き退いたにもかかわらず、歩度根は屢々鈔盜し、さらに我が弟を殺し、私が鈔盜をはたらいていると誣告した。⑭私は夷狄なので礼儀を知らないけれども兄弟子孫とも天子様から印綬を頂いている。牛馬ですら美しい水草を知る。まして私には人としての心がある。（我夷狄雖不知禮義、兄弟子孫受天子印綬。牛馬尚知美水草。況我有人心邪。）將軍、どうぞ私の潔白を天子様に取り次いで下さい。」輔はその書を得ると上聞した。帝はまた田豫に招納安慰させた。比能の勢力は遂に強盛となり、兵力は十余万騎となった。鈔略して財物を得る毎に、均平に分付し、目の前で一決し、すべて私物化することがなかった。故に衆の死力を得ることができ、他の部族のリーダーたちはみなこれを敬い憚った。しかし、なお檀石槐に及ぶほどの勢威をもつことはできなかった。……（青龍）三年（235）中に至って、（幽州刺史領護烏桓校尉王）雄は勇士韓龍を派遣して、比能を刺殺させ、あらためてその弟を立てた。

とある。ここには衆人の信望を受けてリーダーとなるという旧来のリーダー選出の慣習が依然として守られていることが伝えられている（上述①）。しかし、後漢末の混乱を受け、中国内地から数多くの中国人が軻比能に帰属するようになったため（②）、その王権のあり方は大きな変化に直面していたことがうかがわれる。兵器の製造技術（③）、漢字の習得（④）、鮮卑軍の編成・指揮方法の革新（⑤）などがそのことを具体的に示している。そのような鮮卑内部の変容のうえに当時の烏丸校尉の支配体制は存在していたと考えられるが（⑥）、また、これまでの中国側の対鮮卑施策に

も変容が生じており、烏丸校尉の指揮の下、中国内地の反乱の鎮圧のために動員されるようになってい（⑦）。このような状況下、軻比能は塞内と塞外を往来し（⑧）中国側からは王に封ぜられている（⑨）。当時、鮮卑内部においてもその覇権をめぐる熾烈な闘争が展開されており（⑪）、中国からの王号の獲得や交市は、そうした新たな王権を支えるために是非とも必要なものとなってきたことがうかがえる（⑨、⑩）。

こうした抗争に魏が烏丸校尉を通じて関与しているわけであるが（⑫）、その際、軻比能に興味深い夷狄認識が生じていることは注目し得る（⑬、⑭）。すなわち、彼は輔国將軍鮮于輔への書信の中で「夷狄、文字を識らず」「我は夷狄にして礼儀を知らざると雖も、兄弟・子孫 天子の印綬を受く。牛馬すら尚ほ美しき水草を知る。況んや我に人の心有るをや」と述べているのである。先に述べたように後漢末の中国人の帰属によって軻比能あるいはその指導層の鮮卑は文字をある程度理解するようになっていたと考えられる（上述④）。また、この「夷狄、文字を識らず」という考えは、文字を知らないという本人による書信の中で述べられている。これらのことは、この「夷狄、文字を識らず」という表現が割り引いて考えなければいけない性質のものであることを示唆しているとされよう。そしてそこに「夷狄」という用語が使用されていることは更に重要である。この後段には「我は夷狄にして礼儀を知らざると雖も、兄弟・子孫 天子の印綬を受く。牛馬すら尚ほ美しき水草を知る。況んや我に人の心有るをや」と見える。そもそも夷狄は、古代中国の政治思想によれば、人間ではない鬼畜と関連づけて理解された存在であった⁽³⁹⁾。

のちの時代の事例であるが、『晋書』卷104石勒載記に、鮮卑と同じく四夷のなかの胡と見なされた五胡十六国時代における羯出身の英雄で、十六国の一である後趙を建国する石勒に、西晋の忠臣であった劉琨（漢族）がともに西晋のために連帯することを要請したことに対する石勒の返事が伝えられているが、そこに、

私は夷狄であるので役立てない（吾自夷，難為効）。名馬や珍宝を送って劉琨の使いを厚くもてなし、謝婦ののちこれとのつながりを絶つた⁽⁴⁰⁾。

とあり、同載記に、

時に王浚（漢族）は勝手に百官を設置して、奢縦淫虐であった。勒に王浚を併呑する気持ちが生じ、先ず遣使してこれを観察しようとした。……そこで勒はその舎人である王子春・董肇らを遣わし、多く珍宝を齎らし、臣下の礼をとって上表しそこで浚を崇めて天子となし、次のように述べた。「（石）勒はもともと小胡であり、戎裔の出身であります……⁽⁴¹⁾」

とある。当時の石勒の勢威からみたとき、前記事に見える夷狄の表現をもって、石勒が心底より劉琨に謙っている、自らが漢族より劣る夷狄であると思い、その手助けは出来ない、と言っているとは到底考えがたい。石勒がそうした意識を持っていないことは、前記事の終わりで劉琨とのつながりをその後絶つたことから明かである。このことは、また後記事において、彼が王浚を併呑することを目論んでいるにもかかわらず、わざわざ小胡、戎裔と称し、臣下の礼をとって王浚が天子の位につくよう勧進していることから容易に窺うことができるであろう。

イ 混淆化

前項では、烏丸・鮮卑が南下し、なかには塞内へ移動し、中国との関わりを一層深めた状況につ

いて考察したが、その結果中国・東胡との間で多くの「混淆」現象が生じた。いまそれを若干の具体的事例を挙げ考察し、その「混淆」の一端を明らかにしてみよう。

『後漢書』烏桓伝に、

靈帝の初め（168）、烏桓大人で上谷出身の者に難楼というものがあり、その勢力は九千余落であつた。遼西には丘力居というものがあり、その勢力は五千余落であり、みな王を自称王していた。……中平四年（187）になって、前の中山太守張純が、丘力居の衆に加わり、自ら弥天安定王と号し、遂に諸郡烏桓の元帥となり、青徐幽冀四州の地を寇略した。⁽⁴²⁾

とある。これは後漢の中山太守に任じたことのある張純という人物が、烏丸の勢力と連合し、その連合の王となり、華北の諸州を荒らしたことを伝えているが、これはいわば公に連なる人物が東胡を結集し、内地の肥沃な地域を広範に荒らすという、漢のこれまでの歴史には全く見られなかった現象といえることができるであろう。また、同伝には、献帝のときのこととして

広陽の人閻柔は、少くして烏桓・鮮卑の中に没して、その種人の帰信するところとなった。柔はそこで鮮卑の衆の力によって、烏桓校尉邢挙を殺しこれに代った。袁紹はこれによって柔を寵慰し、北辺を安んじようとした。……曹操が河北を平らげると、閻柔は鮮卑・烏桓を率いて帰附した。そこで操は柔を校尉とした。⁽⁴³⁾

とみえる。ここでは①烏丸・鮮卑と連なる閻柔という漢族が、中国王朝の東胡支配の中心というべき烏桓校尉を殺害し、これに取って代わったこと、②その彼が後漢末群雄のなかの中心人物のひとりである袁紹と連なったということ、③その後、曹操の傘下に加わり、正式に烏丸校尉に任じられたことを伝えているが、これも以前には全く見られなかった現象であり、先に見た張純の場合よりも更に相違する、むしろ質的にも相違するともいえるべき後漢極末の状況を見ることができるといえよう。

上で見た「混淆」化の一端はやはり漢代四百年を通じて進行した中国・東胡の境界が徐々に曖昧となっていた過程の一事象といえることができるであろう。

次にこの点を東胡としての烏丸鮮卑における烏桓校尉と相似た職責を、東夷に対して果たしていた東夷校尉の場合について、更に追求してみよう。

『晋書』卷14 地理志、平州の条に、

平州……後漢の末に、公孫度は自ら平州牧と号した。その子の康および康の子の文懿は遼東に擅拠したので、東夷の九種は皆これに服事した。襄平に居り、遼東、昌黎、玄菟、帶方、樂浪五郡を分かつて平州とした。のち還つて幽州に合した。文懿の滅後に及び、護東夷校尉があつて、襄平に居っていた。咸寧二年（276）十月、昌黎、遼東、玄菟、帶方、樂浪等の郡国を分かつて平州を置いた。⁽⁴⁴⁾

とあり、公孫氏政権が滅亡したのち、魏は襄平（現遼陽）に東夷校尉を置き東夷を統御する役割を課した。その具体的活動は、『晋書』卷97 馬韓伝に、

武帝の太康元年（280）と二年に、馬韓の主が頻りに遣使して方物を入貢した。七年、八年、十年にもまた頻りにやってきた。太熙元年（290）、東夷校尉何龕に至りて上獻した。咸寧三年（277）また來たりて、明年また附さんことを請うた。⁽⁴⁵⁾

とあり、同書卷108 慕容廆載記に、

(慕容廆は) また、衆を率いて東して扶余を伐った。扶余王の依慮は自殺した。廆はその国城をたいらげ、万余人を駆って帰った。東夷校尉の何龕は督護の賈沈を派遣して、依慮の子を迎えて王としようとした。廆はその将の孫丁を派遣し騎を率いてこれを待ち伏せした。賈沈は奮戦して孫丁を斬り、遂に扶余の国をもとに復した。廆はその衆に謀って、「吾は先公以来、代々中国を奉ってきた。かつ中華と夷狄ではやり方も異なり、強弱はもとより別である。どうして晋(中国)と競い合うことができようか。どうして中国と間における不和の状態をもって吾が百姓に害するようなことができようか。」といった。そこで遣使して来降してきた。帝はこれを嘉し、拜して鮮卑都督とした。廆は敬礼を東夷府に行おうとして、正装して東夷府の門に至り、士大夫の礼をもって抗礼した。東夷校尉の何龕は嚴重な護衛と共に引見した。廆はそこで服装を改め、戦闘用の服装をして入見した。ある人がその理由を尋ねた。廆は「主人が礼を以て対応せざるに、賓の立場にある私が何をすればいいのか。」龕はその話を聞いてこれを恥じ、いよいよ警戒して憚った。⁽⁴⁶⁾

とあるような、『晋書』等に散見する東夷校尉関係の記載から窺うことができ、烏丸・鮮卑の場合において、幽州の烏桓校尉にあたる役割を果たした官であった。その任官者には、文淑、崔毖、鮮于嬰、何龕、李臻、封抽、陽耽などの漢族を挙げることができる(いずれも『晋書』参照)。こうしたなかで注目すべきは、石勒、慕容儁なども東夷校尉に任じたことがあることである(いずれも『晋書』載記)。もちろんこれは西晋が亡んだのちの五胡政權下におけることであり、またどの程度、実際の職務を遂行したかは疑わしいものがある。

ただし、次のような史料の存在はさらに注目すべきである。すなわち、『晋書』卷108慕容廆載記に、慕容廆の使者の船が風に遭遇して海に没した。そののち慕容廆は更めて前箋を寫し、ならびにその東夷校尉封抽、行遼東相韓矯ら三十余人疏を陶侃の府へ齎した。⁽⁴⁷⁾

とあり、同書卷109慕容皝載記に、慕容皝が死去した直後の慕容皝と慕容仁の争いについて記し、慕容仁は衆を盡して防戦した。慕容皝の弟の慕容幼らは大敗し、みな慕容仁に没した。襄平令の王冰、將軍の孫機は遼東に拠って慕容皝に叛いた。東夷校尉の封抽、護軍の乙逸、遼東相の韓矯、玄菟太守の高詡らは城を棄てて奔還した。慕容仁はここにおいて盡く遼左の地を領有することとなり、車騎將軍、平州刺史、遼東公と自称した。宇文帰、段遼及び鮮卑の諸部はみなこれの援となった。⁽⁴⁸⁾

とあるのがそれである。ここにみえる東夷校尉封抽とは、渤海郡出身の封抽のことであり、慕容廆のとき彼の配下に参じ、その股肱となった漢人名族の一人である(『晋書』慕容皝載記)⁽⁴⁹⁾つまり、上述の記事にみえる東夷校尉封抽とは鮮卑出身の慕容廆・慕容皝傘下の東夷校尉ということになる。このことはかつての公孫淵の拠点、魏晋時代の平州襄平の地にあつて、東夷諸勢力統御に任に当たっていた東夷校尉は、東胡のなかの東部鮮卑の一である鮮卑慕容部がこの地を支配するようになると、その属官化への道を歩んだということを意味している。

結びにかえて

長い年月にわたる鮮卑の南下をへて、中国の地に入った慕容鮮卑は、その後も拡大を続け、352

年遂に皇帝の号を称するに至る。すなわち『晋書』巻110慕容儁載記に、

（慕容儁が）言った。「吾は幽漠射獵の郷、被髮左衽の俗より發した。（中国国内における）暦数の籙など、どうして関わりがあろうか……」永和八年（352）、僭かに皇帝の位に即く。……時に（東晋の）朝廷は使いを遣わして儁に至った。儁はその使者に謂った。汝は還りて（東晋の）天子に白せ。私は人材が乏しい現今の状況から、中国の推すところとなり、すでに帝となった、と。

こうした非漢族首長による皇帝への即位は、五胡十六国時代の多くの非漢族首長によって採られた動きであるが、やがてそれら諸族のなかの西部鮮卑に発する拓跋鮮卑は北魏を建国し華北を統一する。そしてその北魏がのちの隋唐帝国の母胎となり、そこに北方的要素が根強く受け継がれたことについては序で触れたところである。

本稿の目的は、鮮卑南下の開始期から、隋唐帝国に至るまでの時期において、三世紀段階の烏丸や鮮卑をとらえたとき、それがどのような歴史的段階にあったといえるのかを明らかにすることにある。本稿のいままでの考察を踏まえれば、それは、ようやく長城地帯において中国と密接な交流を展開する段階に達しており、以後、烏丸・鮮卑は急速な変容を遂げ、また、中国に甚大な影響を及ぼすようになる起点の時期に当たっていたといえるであろう。

また、本稿の序において筆者は、黄河文明の開始期から続いてきた中国の拡大は秦の始皇帝による長城建設によって、塞外と塞内とが長城という具体的な建造物という形をもって明確に区別される段階にまで到達したが、そのことと本稿で取り上げた、烏丸・鮮卑の南下・中国との融合、あるいは後世のモンゴルや満州に発した元や清などが中国をも領有化し、現在の中国の領域となっていることをどのように整合的に理解すればよいのか、という問題を提示した。誤解を恐れずあえて単純化して述べれば、この問題は歴史上、恒常的に漢族が領有したことはない、満州やモンゴル、新疆等々の地域が現在の中国の領域となっていることをどのように理解すればよいのかという問題と関連することになるが、本稿の考察によれば、秦の始皇帝以降にあっても中国の拡大は止んだわけではなく、以後も蕩々として継続した、そして塞外の民族の塞内を目指す動きは、一見するとその方向性が逆であるが、中国の拡大という動きを推進する主要な要素のひとつであったということになる。このことは、現在の中国が高句麗を中国の歴史の一部と主張することに積極的に賛同するものではないが、北アジア、東アジア地域の歴史を相互に無関係に展開したものではなく、緊密に関係しつつ展開したものにとらえる姿勢もまた必要であろうと筆者は考えるのである。こうした大きな問題は本稿のような一小論で解決しうるものではないが、三世紀段階の烏丸・鮮卑について考える際、これら民族が極めて長いタイムスパンのもと、後世の歴史に極めて大きな影響を及ぼしたことを念頭におきつつ、そのもつ歴史的意味を考えることは、中国史や東部ユーラシアの歴史の総体⁽⁵¹⁾を考える上で極めて重要な意味をもつといえるであろう⁽⁵²⁾。

鮮卑石室(嘎仙洞)外観,
右上空洞が入口
(2007,10撮影)



石室内側から
(写真右手の洞内壁面に
北魏太武帝時代の文字が
刻まれている)



石室入口からの眺望





鮮卑遺跡分布図：孫危『鮮卑考古学文化研究』科学出版社, 2007, P.3

註

- (1)——内田吟風『北アジア史研究—匈奴篇』(同朋舎 1975), 同『北アジア史研究—鮮卑柔然突厥篇』(同朋舎 1975)
- (2)——馬長寿『烏桓と鮮卑』(上海人民出版社, 1962)
- (3)——後掲鮮卑石室(嘎仙洞)写真参照。
- (4)——米文平『鮮卑史研究』(中州古籍出版社, 1994)等参照。
- (5)——魏堅 主編『内蒙古地区鮮卑墓葬的發現与研究』(科学出版社, 2004)
- (6)——孫危『鮮卑考古学文化研究』(科学出版社, 2007)
- (7)——米文平氏前掲書参照。
- (8)——原文:聖武皇帝諱詰汾, 獻帝命南移, 山谷高深, 九難八阻, 於是欲止。有神獸, 其形似馬, 其聲類牛, 先行導引, 歷年乃出, 始居匈奴之故地。
- (9)——鮮卑の神話については, 拙稿「鮮卑の文字について」(九州大学 21 世紀 COE プログラム『東アジアと日本: 交流と変容 統括ワークショップ報告書』2007 を参照されたい。

- (10)——後掲鮮卑遺跡分布図参照
- (11)——嗚呼, 自隋以後, 名称揚于時者, 代北子孫十居六七。氏族之弁, 果何益哉。
- (12)——中国衣冠, 自北齊以来, 乃全用胡服。窄袖緋綠, 短衣, 長靱靴, 有蹀躞帶, 皆胡服也。
- (13)——川本『中華の崩壊と拡大』(講談社, 2005 年), 同「魏晋南北朝の世界秩序と北朝隋唐の世界秩序」(『史淵』145 輯, 2008) 参照。
- (14)——中山国は戦国の七雄が存在した時代, 太行山脈の東に存在した。遊牧民族としての白狄が建てた国と考えられている。王墓からは独特の金属器が出土している。
- (15)——周知のように中国域内の南方や西方などには, 蛮や越, 羌などの非漢族がその後も存続したが, いまこの問題については省略する。なお, こうした問題については, 拙著『魏晋南北朝時代の民族問題』(汲古書院, 1998 年), 同『中国史のなかの諸民族』(山川出版社, 2004 年) 同『中華の崩壊と拡大』(講談社, 2005 年) 等参照。
- (16)——鮮卑のうち東方に存在した鮮卑。後漢末, 鮮卑

を統合した檀石槐が、それを東部・中部・西部の三部に編成したことに由来する。檀石槐については後論でもう一度取り上げる。

(17)——『後漢書』の烏桓伝によれば、烏丸は二種の穀物を栽培しており、一つは黍に似ているが粘らない稗、もう一つは実が葵の実のような東牆であったという。

(18)——燕有賢將秦開、為質於胡、胡甚信之。歸而襲破走東胡。東胡卻千餘里。與荊軻刺秦王秦舞陽者、開之孫也。燕亦築長城、自遼陽至襄平、置上谷、漁陽、右北平、遼西、遼東郡以拒胡。當是之時、冠帶戰國七、而三國邊於匈奴。

(19)——夫燕亦勃、碣之間一都會也。南通齊趙、東北邊胡。上谷至遼東、地踔遠、人民希。數被寇、大與趙代俗相類、而民雕悍少慮、有魚鹽棗栗之饒。北鄰烏桓、夫餘、東綰穢貉、朝鮮、真番之利。

(20)——烏桓自為冒頓所破、衆遂孤弱、常臣服匈奴、歲輸牛馬羊皮。過時不具、輒沒其妻子。及武帝遣驃騎將軍霍去病擊破匈奴左地、因徙烏桓於上谷漁陽右北平遼西遼東五郡塞外、為漢偵察匈奴動靜。其大人歲一朝見。於是始置護烏桓校尉、秩二千石、擁節監領之、使不得與匈奴交通。

(21)——護烏桓校尉はこのとき、幽州の治のあった薊(現北京)に駐在し、府をおいた。護烏桓校尉については船木勝馬「烏桓校尉・匈奴中郎將をめぐる諸問題」(『江上波夫教授古稀記念論集 歴史編』山川出版社、1977)参照。

(22)——因是結怨於莽。匈奴因誘其豪帥以為吏、余者皆羈縻屬之。

(23)——王莽篡位、欲擊匈奴、興十二部軍。東域將嚴尤、領烏桓・丁令兵屯代郡、皆質其妻子於郡。烏桓不便水土、懼久屯不休、數求謁去。莽不敢遣、遂自亡畔、還為抄盜、而諸郡盡殺其質。因是結怨於莽。匈奴因誘其豪帥以為吏、余者皆羈縻屬之。

(24)——是歲、……烏桓擊破匈奴、匈奴北徙、漠南地空。

(25)——(建武)二十二年、匈奴国乱、烏桓乘弱擊破之、匈奴輒北徙數千里、漠南地空。帝乃以幣帛賂烏桓。二十五年、遼西烏桓大人郝且等九百二十二人率衆、詣闕朝貢、獻奴婢牛馬及弓虎豹貂皮。是時四夷朝貢、絡駟而至。天子乃命大会勞饗、賜以珍寶。烏桓或願留宿。於是封其渠帥為侯王君長者八十一人、皆居塞內、布於緣邊諸郡、令招來種人、給其衣食、遂為漢偵候、助擊匈奴、鮮卑。時司徒掾班彪上言、「烏桓天性輕黠、好為寇賊。若久放縱而無綏領者、必復侵掠居人。但委主降掾史、恐非所能制。臣愚以為宜復置烏桓校尉、誠有益於附集、省国

家之辺慮。」帝從之、於是始復置校尉於上谷寧城、開營府、并領鮮卑、賞賜質子、歲時互市焉。

(26)——烏桓校尉ははじめ漢の武帝の時、護烏桓校尉と呼ばれ、幽州におかれた。通鑑の胡註に「至王莽時、烏桓叛、校尉由是罷。」とある。しかし、後漢書南匈奴伝には王莽の時、護烏桓使者がみえ、護烏桓校尉の改名されたものように見える。漢官儀には「長史一人、司馬二人、皆六百石、領鮮卑客賜、質子、歲時胡市馬。」とある。客賜とは客が主人の賜うものを受けることをいう。(27)——南匈奴については、内田氏前掲書『北アジア史研究一匈奴篇』参照。

(28)——安帝永初中(1世紀初)、鮮卑大人燕荔陽詣闕朝賀。鄧太后賜燕荔陽王印綬、赤車參駕、令止烏桓校尉所居寧城下、通胡市、因築南北兩部質館。鮮卑邑落百二十部、各遣入質。

(29)——時漁陽赤山烏桓歆志賁等、數寇上谷。永平元年、祭彤復路偏何擊歆志賁、破斬之。於是鮮卑大人皆來歸附、並詣遼東受賞賜。青徐二州給錢歲二億七千萬為常。明章二世、保塞無事。

(30)——和帝永元(89～105)中、大將軍竇憲遣右校尉耿种、擊破匈奴。北單于逃走、鮮卑因此輒徙捫其地。匈奴余种留者尚有十余万落、皆自号鮮卑。鮮卑由此漸盛。

(31)——①～⑬の原文：魏書曰、烏丸者、東胡也。……①俗善騎射、隨水草放牧、居無常處。②以穹廬為宅、皆東向、③日弋獵禽獸、食肉飲酪、以毛毳為衣。④貴少賤老、其性悍驚、怒則殺父兄、而終不害其母、以母有族類、父兄以己為種、無復報者故也。⑤常推募勇健能理決鬪訟相侵犯者為大人。邑落各有小帥、不世繼也。⑥數百千落自為一部、大人有所招呼、刻木為信、邑落傳行。無文字、而部衆莫敢違犯。⑦氏姓無常、以大人健者名字為姓。⑧大人已下、各自畜牧治產、不相徭役。⑨其嫁娶皆先私通、略將女去、或半歲百日、然後遣媒人送馬牛羊以為聘娶之禮。婿隨妻歸、見妻家無尊卑、旦起皆拜、而不自拜其父母。為妻家僕役二年、妻家乃厚遣送女。居處財物、一出妻家。故其俗從婦人計、至戰鬪時、乃自決之。⑩父子男女、相對踞踞。⑪悉髡頭以為輕便。婦人至嫁時、乃養髮、分為髻、著句決、飾以金碧。猶中國有冠步搖也。⑫父兄死、妻後母執嫂。若無執嫂者、則己子以親之次妻伯叔焉。死則歸其故夫。……⑬儀貴兵死、斂屍有棺。始死則哭、葬則歌舞相送、肥養犬、以采繩嬰牽、并取亡者所乘馬、衣物、生時服飾、皆燒以送之。特屬累犬、使護死者神靈歸乎赤山。赤山在遼東西北數千里、如中國人以死之魂神歸泰山也。至葬日、夜聚親舊舊人坐、牽犬馬歷位、或歌哭者、擲肉與之。使二人口頌呪文、使死者魂神

徑至，歷險阻，勿令橫鬼遮護達其赤山。然後殺犬馬衣物燒之。……

(32)——鮮卑者，亦東胡之支也。別依鮮卑山，故因号焉。其言語習俗与烏桓同。

(33)——この『後漢書』の記事の底本となったと考えられる『魏書』には、「鮮卑亦東胡之余也。別保鮮卑山，因号焉。其言語習俗与烏丸同。」とあり，若干の違いが見られる。

(34)——死則潛埋，無墳壟處所。至於葬送，皆虛設棺槨，立冢槨，生時車馬 器用皆燒之，以送亡者。

(35)——高宗崩。故事，国有大喪，三日之後，御服器物一以燒焚。百官及中宮皆号泣而臨之。后悲叫自投火中，左右救之。良久乃蘇。

(36)——延熹九年（166）……朝廷積患之（檀石槐），而不能制。遂遣使持印綬封檀石槐為王，欲与和親。檀石槐不敢受，而寇抄滋甚。乃分其地為三部，從右北平以東至遼東，接夫餘・濊貊二十餘邑為東部。從右北平以西至上谷十餘邑為中部，從上谷以西至敦煌，烏孫二十餘邑為西部，各置大人主領之。皆属檀石槐……光和中（180年代）檀石槐死，子和連代立。……自檀石槐後，諸大人遂相伝襲。

(37)——靈帝初（168），烏桓大人上谷有難樓者，衆九千余落，遼西有丘力居者，衆五千落，皆自称王。又遼東蘇僕延，衆千余落，自称峭王，右北平烏延，衆八百余落，自称汗露王，並勇健而多計策。

(38)——軻比能，本小種鮮卑。以勇健，斷法平端，不貪財物。衆推以為大人。部落近塞，自袁紹據河北，中國人多亡叛歸之，教作兵器鎧楯，頗學文字。故其勒御部衆，擬則中國，出入弋獵，建立旌麾，以鼓節為進退。建安中，因閭柔上貢獻。太祖（曹操）西征關中，田銀反河間，比能將三千餘騎隨柔擊破銀。後代郡烏丸反，比能復助為寇害。太祖以鄴侯侯彰為驍騎將軍，北征，大破之。比能走出塞。後復通貢獻。延康初（220），比能遣使獻馬，文帝亦立比能為附義王。黃初二年（221），比能出諸魏人在鮮卑者五百餘家，還居代郡。明年，比能帥部落大人小子代郡烏丸修武盧等三千餘騎，驅牛馬七萬餘口交市，遣魏人千餘家居上谷。後與東部鮮卑大人素利及步度根三部爭鬪，更相攻擊。田豫和合，使不得相侵。五年，比能復擊素利，豫帥輕騎，徑進掩其後。比能使別小帥瑱奴拒豫。豫進討，破走之。由是懷貳。乃與輔國將軍鮮于輔書曰，「夷狄不識文字，故校尉閭柔保我於天子。我與素利為讐。往年攻擊之，而田校尉助素利。我臨陳使瑱奴往。聞使君來，即便引軍退，步度根數數抄盜，又殺我弟，而誣我以鈔盜。我夷狄雖不知禮義，兄弟子孫受天子印綬。牛馬尚知美水

草。況我有人心邪。將軍當保明我於天子。」輔得書以聞。帝復使豫招納安慰，比能衆遂彊盛，控弦十餘萬騎。每鈔略得財物，均平分付，一決目前，終無所私。故得衆死力，餘部大人皆敬憚之，然猶未能及檀石槐也。……至（青龍）三年（235）中，（幽州刺史領護烏桓校尉王）雄遣勇士韓龍，刺殺比能，更立其弟。

(39)——山田統「天下という概念と国家の形成」（『山田統著作集』第1巻，明治書院，1981，初出1949），安部健夫「中国人の天下觀念－政治思想史的試論－」（ハーバード・燕京・東方文化委員会，1961），渡辺信一郎「中国古代の王権と天下秩序－日中比較史の視点から」（校倉書房，2003）等参照。

(40)——吾自夷，難為効。遣名馬珍宝，厚賓其使，謝婦以絶之。

(41)——時王浚署置百官，奢縱淫虐。勒有吞并之意。欲先遣使以觀察之。……乃遣其舍人王子春董肇等，多齎珍宝，奉表崇浚為天子曰，（石）勒本小胡，出於戎裔……

(42)——靈帝初（168），烏桓大人上谷有難樓者，衆九千余落，遼西有丘力居者，衆五千余落，皆自称王。又遼東蘇僕延，衆千余落，自称峭王，右北平烏延，衆八百余落，自称汗露王，並勇健而多計策。中平四年（187），前中山太守張純，入丘力居衆中，自号弥天安定王，遂為諸郡烏桓元帥，寇略青徐幽冀四州。

(43)——（獻帝のとき）広陽人閭柔，少没烏桓鮮卑中，為其種人所帰信。柔乃因鮮卑衆，殺烏桓校尉邢挙而代之。袁紹因寵慰柔，以安北辺。……曹操平河北，閭柔率鮮卑，烏桓帰附。操即以柔為校尉。

(44)——平州……後漢末，公孫度，自号平州牧。及其子康，及康子文懿並擅挾遼東，東夷九種皆服事焉。居襄平，而分遼東，昌黎，玄菟，帶方，楽浪五郡為平州。後還合幽州。及文懿滅後，有護東夷校尉，居襄平。咸寧二年（276）十月，分昌黎，遼東，玄菟，帶方，楽浪等郡国置平州。……

(45)——武帝太康元年（280），二年，其主頻遣使入貢方物。七年，八年，十年，又頻至。太熙元年（290），詣東夷校尉何龕上獻。咸寧三年（277）復來，明年又請附。

(46)——（慕容廆）又率衆東伐扶余。扶余王依慮自殺。廆夷其国城，驅万余人而帰。東夷校尉何龕遣督護賈沈，將迎立依慮之子為王。廆遣其將孫丁率騎邀之。沈力戰斬丁，遂復扶余之國。廆謀於其衆曰，吾先公以來世奉中国，且華裔理殊，強弱固別，豈能与晉競乎。何為不和以害吾百姓邪。」乃遣使來降，帝嘉之，拜為鮮卑都督。廆致敬於東夷府，巾衣詣門，抗士大夫之礼。何龕嚴兵引見。廆

乃改服戎衣而入。人問其故。庖曰、「主人不以礼，賓復何為哉。」龔聞而慚之，彌加敬憚。

(47)——庖（慕容庖）使者遭風沒海。其後寫更寫前箋，并其東夷校尉封抽，行遼東相韓矯等三十餘人疏，上（陶）侃府曰，……

(48)——仁盡衆距戰。幼等大敗，皆沒於仁。襄平令王冰，將軍孫機以遼東叛于皝。東夷校尉封抽，護軍乙逸，遼東相韓矯，玄菟太守高詡等棄城奔還。仁於是盡有遼左之地，自称車騎將軍，平州刺史，遼東公。宇文弼，段遼及鮮卑諸部並為之援。

(49)——時二京傾覆，幽冀淪陷，庖刑政修明，虛懷引納，流亡士庶多襁負歸之。庖乃立郡以統流人。冀州人為冀陽郡，豫州人為成周郡，青州人為營丘郡，并州人為唐國郡。於是推舉賢才，委以庶政。以河東裴嶷，代郡魯昌，北平陽耽為謀主。北海逢羨，廣平游邃，北平西方虔，渤海封抽，西河宋爽，河東裴開為股肱。渤海封弈，平原宋該，安定皇甫岌，蘭陵繆愷以文章才儁任居樞要。會稽朱左車，太山胡毋翼，魯國孔纂以舊德清重引為賓友。平原劉讚儒學

該通，引為東庠祭酒。其世子皝率國胄束脩受業焉。庖覽政之暇，親臨聽之。於是路有頌聲，禮讓興矣。

(50)——（慕容皝）曰，吾本幽漠射獵之鄉，被髮左衽之俗，曆數之籙，寧有分邪。……因以永和八年（352）僭即皇帝位。……時朝廷遣使詣僞，僞謂使者曰，汝還白天子。我承人乏，為中國所推，已為帝矣。

(51)——中韓兩國の間での高句麗歴史論争については、関係する論考などの数は極めて多いが、ここでは近年の成果として古畑徹「中韓高句麗歴史論争のゆくえ」（弁納オー・鶴園裕編『東アジア共生の歴史的基礎－日本・中国・南北코리아の対話』（御茶の水書房，2008）をあげておきたい。

(52)——三国段階以降の鮮卑の動向については、拙著『魏晉南北朝時代の民族問題』（汲古書院，1998年），同『中華の崩壊と拡大』（講談社，2005年）参照。なお，このような視角から筆者はかつて中国史全体を把握しようと試みたことがある。それについては『中国史のなかの諸民族』（山川出版社，2004年）参照。

（九州大学大学院人文科学府，国立歴史民俗博物館共同研究員）

（2008年10月31日受理，2008年12月5日審査終了）

The Wuwan and Xianbei during the Stage of the Three Kingdoms : A Study from the Perspective of Interaction and Changes

KAWAMOTO Yoshiaki

One has the feeling that in terms of literature, we have complete explanations from the classical studies of Ginpu Uchida in Japan, Ma Changshou in China and others concerning the Wuwan and Xianbei. However, the discovery of Xianbei stone tombs by Mi Wenping has added new knowledge, and recently there have been substantial advances in research on the Xianbei from an archaeological perspective, as seen in studies of tombs like those in Weijian and Sunwei. For this reason, a re-examination of the Wuwan and Xianbei during this period that considers such findings has considerable significance.

As they moved south, the Xianbei tribes strengthened their relations with China and eventually established Xianbei empires of their own within China. Northern Wei, which was one of these, became a prototype for the later Sui and Tang empires which unified China under imperial rule. The expansion of the Huaxia tribes after the beginning of Yellow River civilization that came about as a result of the construction of the Great Wall in the Qin period, marked a huge shift in which the Great Wall became both a concrete and symbolic representation that marked the land to the south as China and the land to the north as belonging to the Hu tribes. As a result, the mixing of Chinese with outsiders that had occurred in Huabei during the period was reversed, and this saw the start of a new period that was marked by the existence of the “four barbarian peoples” on the periphery of China. This Chinese-barbarian order with the Great Wall acting as a boundary between the north and south was continued in successive periods. However, as mentioned previously, the southward migration of the northern tribes toward China continued, and as seen in the examples of the Mongol and Manchu peoples during much later times, a huge empire came to be built, which included the native lands of these peoples as well as China. When viewed from this perspective, there arises the question of the nature of the relationship that the Wuwan and Xianbei of the Three Kingdoms period, the topic of this paper, has with Chinese history and eastern Eurasian history in general.

While considering the above question, this paper discusses the migration and interaction of the Wuwan and Xianbei during the Three Kingdoms period and the historical significance of the accompanying changes.

Keywords: Wuwan (Wuhuan) Xianbei, Xiongnu, migration, Yi Di, China
